

優しさの奥行き (1)

—ヨハネによる福音書 21 章 22 節—

矢野 眞実

「あなたに何の関係があるか」。聞く者を突き放すような、なんとも厳しくてきつい物言いに響きます。「ヨハネによる福音書」の最終章を締め括るイエス・キリストの言葉です。イエス様はいつも物腰が柔らかで優しいお方、との印象を持つ私たちにとっては、なんとなくしっくりいかない、座りの悪いお言葉ではないでしょうか。そのため、こうした違和感を少しなりとも和らげようと、私たちはいろいろと頭を捻ります。似たような箇所はほかにも見受けられます。例えば、御自分の母マリアに向かって「婦人よ」(ヨハネ 2:4 他) と呼びかけられたり、まずは父親を葬りにいかせてほしいと願う人に対し「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい」(ルカ 9:60 他) と言われたりする。また、(裏切りの) 弟子のユダに向かって「しようとしていることを、今すぐ、しなさい」(ヨハネ 13:27) と告げられたり、はては「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。・・・そのとき、わたしはきっぱりとこう言おう。『あなたたちのことは全然知らない』」(マタイ 7:21~23) と言い放たれたりもする。どこか冷たく聞こえ、私たちの馴染み親しんでいるイエス様からは少しばかり外れた感じがします。実際のところは、それぞれにそれぞれの背景や文脈があり、(それらから来る様々な解釈のあり方も含め) 必ずしも厳しいだけのお言葉ではないようです。ただ、(全般的にはそのように言えそうなものの) こと 今回取り上げたヨハネの箇所に関しては、その色合いを拭うことはどうも容易でなさそうです。つまり、どうみても、厳しさの色合いを緩めて和らげることはできそうにありません。しかも、もしそこに「恵み」というものがあるとしたら、その厳しさを正面から受け止めることこそが大切になってくるように思います。そしてそれは、薄っぺらでない、真実深くあるところの恵みのように思われるのです。次回(イエスがペトロに 3 度「愛しているか」と問われた、今回の直前の箇所を予定) とあわせ、そのあたりのことを御一緒に、要点を絞って簡潔に考えられたらと思います。

何はさておき、聖書本文の当該箇所をいま一度 見てみましょう。続けて言われた言葉まで含めると、イエスはペトロに次のように語られました。

あなたに何の関係があるか。あなたは、わたしに従いなさい。(新共同訳)

御参考までに、邦訳と英訳のうち、他の主要な訳を以下に記しておきます。

あなたに何の関わりがあるのか。あなたは、わたしに従って来なさい。(新共同訳 新翻訳事業パイロット版)

あなたにはなんの係わりがあるか。あなたは、わたしに従ってきなさい。(口語訳)

汝になにの関係あらんや、汝は我に従へ。(文語訳)

あなたには関係がない。あなたは私について来なさい。(岩波訳聖書)

それがあなたに何のかかわりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。(新改訳)

それはあなたに関係ない。あなたはわたしに従え。(前田護郎訳)

それはあなたの知ったことではない。あなたは(ただ)わたしについて来ればよろしい。
(塚本虎二訳)

what is that to you? Follow me! (New Revised Standard Version)

what is that to you? Follow me! (Revised Standard Version)

what is it to you? Follow me. (Revised English Bible)

what is it to you? Follow me. (New English Bible)

what *is that* to you? You follow Me. (New King James Version)

what *is that* to thee? follow thou me. (King James Version)

what is that to you? You must follow me. (New International Version)

what does it matter to you? You are to follow me. (Jerusalem Bible)

what is that to you? Follow me! (Today's English Version)

見たところ、訳出間で内容的に大きな違いはないようです(NKJV と KJV の下線部については後述)。要するに、元々のギリシア語原文がそれ自体、読み取りを困難にするような曖昧さや複雑さを含んでいないということです。下に見るとおり、原文は極めて直截にして明快です。それどころか、語る者の荒々しささえ感じさせるような構文になっています。

^{ティ} ^{プロス} ^セ; ^{シュ} ^{モイ} ^ア ^コ ^ル ^セ ^イ
τί πρὸς σέ; σύ μοι ἀκολουθεί. (ギリシア語原文)

各語を順に直訳すると、次のようになります。

τί (疑問詞、中性、単数、主格 <τίς, τί) = 何 (what)

πρὸς (前置詞、+対格 <πρός) = ~に (to)

σέ (2人称代名詞、単数、対格 <σύ) = あなた (you)

; = ?

→ 何 あなたに ? (what to you?)

σύ (2人称代名詞、単数、主格 <σύ) = あなたは (you)

μοι (1人称代名詞、単数、与格 <μοί <ἐγώ) = 私に (me)

ἀκολουθεῖ (動詞、命令法、能動相、現在、単数、2 人称 <^アκο^ル-^ソω<^アκο^ル-^セο^ー) = 従
 いなさい (follow) → あなたは 私に 従いなさい (you follow me)

1. まず第一に、第 1 の文に動詞がないことです。「何」「あなたに？」と、単語を断片的に連続して投げかけているがごとき構文です。このため、上記の NKJV と KJV は下線部の "is that" を斜体にして表記し、原文における抜けを明確にしています。どうみても、丁寧で優しい物言いとは考えられません。
2. 次に、第 1 文の "σέ" に (鋭) アクセントが付されていることです。この語はいわゆる「前接辞」のため、通常は直前の語にこれを譲り、自らはアクセントを失います。にもかかわらずそれが付されているということは、つまり、"σέ" (あなた) が強調されていることを表わしています (直前の "πρὸς" はこれを受け、アクセントが「鋭」から「重」に変化)。
3. 第三は、続く第 2 の文でも "σú" と、必ずしも必要でない主語が付加され、挿入されていることです。ギリシア語では動詞が基本的に主語を含む仕方機能するため、通常はそれを添える必要がありません。なのに、その主語がここでわざわざ加えられているということは、つまり、ここでもまた "σú" (あなたは) が強調されているということです。NKJV と KJV はこの点を明確にするため、ここでもそれぞれ下線部のように、(英語でも命令法では普通、主語を添えなくてもよいところに) "You" "thou" と主語を付記しています。
4. 加えて、第 1 文の "σέ" と第 2 文の "σú" の 語順における強調です。ギリシア語では通常、文頭が強調度第一で、文末が第二となります。したがって、文末に置かれている 第 1 文の "σέ" は、強調度において第二位。文頭にある 第 2 文の "σú" は、強調度第一位となります。第 1 文、第 2 文のいずれにおいても、「あなた」が強く意識されていることが分かります。
5. そもそも、第 2 文が命令法で言われていること。これも語調の強さを物語るものと言えるでしょう。
6. そして最後に、その命令法が現在形で用いられていることです。ギリシア語の現在時称が事の継続性を含意することは周知のとおりですが、ということはすなわち、「(私に) 従う」ということを一回限りのその時だけのこととしてではなく、継続的な不断のこととして行ないなさいと言われていることとなります。「従い続けなさい」「いつも従っていなさい」とは、なんと強い要請でしょうか。

このように、ヨハネ 21:22 におけるイエスの言葉はどうあがいても、そのトーンを和らげたり弱めたりすることはできそうにありません。実際、(筆者の当たった範囲内ではあるものの) どの注解書を見ても、いわゆる優しいイエス様像を今回の箇所からなおも搾り出しているものは見当たりません。そこにあるのはやはり、構文全体の勢いの強さと「あなた」の重ねての強調、そして「従う」ということの真剣さ・誠実さの指摘のように思われます。もちろん、イエスは元々 ギリシア語でなくアラム語でおっしゃられたのでしょうし、現在の聖書に見る形での表現や構文も、ヨハネ福音書の編集者らが伝承を介して受け取り理解したものと言えるでしょう。また たしかに、アクセント等の

記号類も後代の研究者が後に付したものです。しかしながら、少なくともそうした歴史に関わった者たちは皆、今回のイエスの言葉をやわなものではなく、文字どおり厳しいものとして受け取った。そのことだけは間違いのないように思います。しかも、それは言うまでもなく、まずもってペトロに対してのものではあったものの、が同時に、イエス・キリストに触れるすべての者たちに対するものでもあるとしたなら、これを軽々にやり過ぎすることはできないのではないのでしょうか。(ギリシア語原文の理解については、西南学院大学神学部の須藤伊知郎先生に御助言いただきました。感謝をいたします)

そして何より、(今回、ここで詳しく扱うことはしませんが) そこにこそ 底の浅い表面的なものではない、真実深い意味での恵みがあるとしたら……。強く厳しく響いてくるイエスの言葉を、私たちはその深さで聴き取らねばならないように思います。ここでは、そのことを考える切り口として、一つの文章を以下に引用しておきます。日本基督教団の隠退牧師、加藤常昭先生の一文です。

しかし、それにしても、ここでなぜ、ペトロは「この人はどうなるのでしょうか」と尋ねたのだろうか。……。この箇所について説教する人や講解の文章を書く人がときどき好んで引用するのは……。改革者カルヴァンの注解の中にある言葉であります。カルヴァンは、これをどう理解したかという、ペトロの中にある好奇心のなせるわざだと言っています。われわれの中にもある好奇心、他人の運命に対する好奇心、しかも、この場合は……。自分と比べての好奇心です。……。なぜカルヴァンが、そんなことを書いたのか。……。理由は何も書いてないのに、そう読んだというのは、カルヴァン自身の中に、この好奇心の罪を覚えるところがあったに違いない。伝道者として身に覚えがある。すぐに比べる。自分と他人を比べる。牧師も比べる。いや、牧師こそ比べるかもしれません。主イエスの弟子としての、自分の手柄を考えたとき、すぐにそういうことになるかもしれない。……

……。少なくともペトロは、ここで、もっと親切な主イエスの答えを期待したかもしれません。……。だが、主イエスは、ここでそんなことを少しも言わない。

「……。あなたに何の関係があるか」。これは実に厳しい言葉であります。これはあなたに関係のないことである。明らかに、まだペトロの心の中に残っていた罪の根っこを断ち切るみ言葉です。……。ここで完全に罪の根っこが取り去られ、ペトロの主に対する愛が全うされます。別の言葉で言うならば、まさに、他人に対する好奇心から解き放たれます。その意味では、ほかの人のことなんか考えなくなるのであります。……。ただあなたは、わたしについて来なさいと言われました。

……。ただ関心を注ぐべきは主イエスに対してであり、そして、主イエスの命じられたところに赴いたところで出会う人びとである。……。これは厳しいけれども、まことにありがたいみ言葉であります。

(加藤常昭『ヨハネによる福音書 5』加藤常昭説教全集 16、教文館、2005年、289～292頁)

加藤先生は、「厳しい。けれども、まことにありがたいみ言葉」と言われます。カルヴァンの注解

がもし的を得たものだとしたら、そして その実存的理解たる加藤先生の解釈がもし適切なものだとしたら、そこから解き放たれる私たちはなんと幸いなことかと思わされます。好奇心、比較、手柄、競争、嫉妬^{しつと}・・・の どうにもしづとい囚^{とら}われから解放してもらえらるとしたら、それは実際、恵まれた人間と言えるのではないのでしょうか。それらから解き放たれて、一筋の思いで主に従い、隣人に仕えることができたとしら・・・。厳しさは必ずしも優しさと対立するものでなく、しばしばそこにこそ真の優しさがあり、恵みの深さがあると言えるのかもしれませんが。「あなたに何の関係があるか」との一言^{ひとこと}がはたして、イエス・キリストのそうした真理に想いを巡らす言葉となるかどうか。御一緒に考えられたらと思います。

ちなみに、アメリカの著名な新約聖書学者 Raymond E. Brown (レイモンド・E. ブラウン) は次のように記して、ヨハネ福音書における「従う」ということの重要性を示唆しています。

It is interesting that Smiths ..., following E. Schweizer, interprets vs. 22 as directed to the Christian at large: You are not to be concerned that you may die or suffer martyrdom while another lives until the parousia; your one calling is to follow me no matter where that following may lead you. It has been noted by Bernard ... that the risen Jesus' last words (vs. 22) are those of his directive to Peter: "Your concern is to follow me"; and after all, that is the essential precept of the Christian life. By way of inclusion between chs. xxi and i, we may observe that the disciples began their contact with Jesus on the note of following him (i 37), and their contact with him is closed on the same note.

(Raymond E. Brown, *The Gospel according to John (xiii-xxi)*, The Anchor Bible 29A, Doubleday & Company, Inc., 1981, p. 1122)

すなわち、ヨハネによる福音書は1章と21章で全体を挟み込み包み込む構成になっているが、まさにその最初の章と終わりの章に イエスと弟子たちとの事柄が置かれ、記されているというのです。そして、そのどちらもが、「(イエスに) 従った」(1:37)「(わたしに) 従いなさい」(21:22) というふうに、「従う」という言葉をもって書き留められていると、Brownはそう語ります。

だとしたら、その「(イエス・キリストに) 従う」ということが、他の誰でもないこの「自分自身」のこととして、無用の囚われから解放されて起こされるようにということ。そのことがヨハネ福音書の中心的テーマの一つになっていると言えるかもしれません。

ヨハネによる福音書の21章22節。「あなたに何の関係があるか。あなたは、わたしに従いなさい」との、イエスの厳しいお言葉。しかし、それは実は、恵みの奥行きを感じさせる一コマなのではないか。そして、それはすなわち、優しさの奥行きを教えてくれるやり取りでもあるのでは

ないか。筆者にはそう思われてなりません。

【参考】

御参考までに、上記以外の注解書の関連箇所を以下に書き出しておきます。

松永希久夫「ヨハネによる福音書」『新共同訳 新約聖書略解』（山内眞監修）日本基督教団出版局、2008年、311～312頁。

二〇 《胸もとに寄りかかったまま》という句が繰り返され、明らかに強調がある。

二一 愛弟子がいつでも優位性を保っているので気にするという設定で、ペトロが発言している。編集者としては、十二使徒やペトロに権威を置く系譜の教会と、愛弟子に権威を置く教会との関係を論じていることになろう。

二二 イエスの答えは、どちらが優位かを論ずることは無意味で、イエスとペトロ、イエスと愛弟子との関係は個々に違い、重要なのは《あなたは、わたしに従いなさい》という命令に忠実であることだけである。脱落者が出たヨハネ教団では、イエスと個々の信徒との関係が問われざるを得ない状況に追い込まれていただけに、この答えは明快である。

ジークフリート・シュルツ（松田伊作訳）『ヨハネによる福音書』（NTD 新約聖書註解 4）NTD 新約聖書註解刊行会、1986年、484～485頁。

²¹⁻²² この愛弟子を見たペテロはすぐ、「この人はどうなるのでしょうか」という簡単には分かり難い問いを発する。つまりこれは、あなたは彼にどういう運命を与えたのかということである。イエスの答えによって、愛弟子はペテロのように殉教死を共にするのではなく、復活した主の来臨の時まで生きながらえるのだ、ということがはっきりさせられる。

²³ しかしそういった解釈を編集者はただちに間違いであるとし、訂正して言う。・・・

（当該箇所への直接の言及、解説はなし）

森野善右衛門『世の光キリスト』（現代聖書講解説教 8）新教出版社、1983年、279頁。

「・・・あなたには何の係わりがあるか。あなたはわたしに従って来なさい」。これが、ペテロに語られた、ヨハネ福音書におけるイエスの最後の言葉です。他の弟子たちがどうなるかを気にする必要はない。あなたはただ、わたしの言葉に従って、わたしから与えられた使命に忠実に生きればそれでよいのだ、とイエスは言われるのです。

このイエスの言葉をもって、ヨハネ福音書二一章はしめくくられ、その結末に到達しました。

George R. Beasley-Murray, *John*, Word Biblical Commentary 36, Word Books, 1987, p. 410.

21-22 While Peter's question is sometimes viewed as trifling, posed merely to enable the saying of Jesus to be announced in v 22, it is comprehensible enough, given the frequent association of Peter and the other disciple in the Gospel. If Peter's path in life has now been made known to him, it is natural for him to be curious as to what is in store for his colleague. But the answer of Jesus is unexpectedly sharp in tone. He makes it plain that his will for his friend is of no concern to Peter, not even if that disciple is called to tread a quieter and less demanding way than his; if instead of the call to martyrdom it be the Lord's will for the Beloved Disciple to remain till the Lord himself shall come, that should make no difference to Peter in the pursuit of his vocation. The one thing that matters is that he should follow his Lord—in the present moment—to hear what further word may yet be addressed to him, and in the days and years ahead, as the risen Lord guides him and reveals his unfolding task, till the final call to follow him in a death to the glory of God. Accordingly the command given in v 19 is repeated, only yet more emphatically: "As for you, *you follow me.*"